
ウソとホント(仮)

條 夕姫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ウソとホント（仮）

【Zコード】

Z3480T

【作者名】

絛 夕姫

【あらすじ】

「魔王を倒してくれ」と15歳にして異世界に召喚されてしまった少女は、理不尽なその国に対し憎悪の感情を抱いていた・・・のも最初の方だけ。その国の王子に恋をして、見事恋仲になつた少女は彼との穏やかな暮らしを獲得するために魔王との戦争に挑み、魔王を無事に封印することに成功した。幸せの絶頂にいるはずの彼女だったが、もう既に身体は限界で。「私が居なくなつても哀しまないで・・・」そう彼女が意識を閉ざしかけた瞬間、彼女の視界には彼と親友が口づけを交わすシーンが飛び込んでくる・・・！？

主人公最強系です。王道を極めようと書き始めたので、「よくある設定」がつじゅつじゅ出てきます。そんでもってチートです。超チート。そんなでも良いよーって方のみ読んじやつてください（笑） 基本、ロメディ w

プロローグ（前書き）

素敵なくらいの見切り発車です。

他の小説が行き詰ってしまった為にちょっとリハビリで書き始めました。

一応ちよいちよい復活し始めてるので他小説に關しましては、もう
ちょい待ってください。rzn

プロローグ

身体の中の魔力を凝縮させ、私は文字通り心血注いで封印魔法を完成させた。

目の前の魔王が悔しそうに苦悶の表情を作り上げ、呪詛の言葉を吐いてくるが、そんなものが無くても私の命は尽きる寸前だ。無意味以外の何物でもない。

後方から私の名前を呼ぶ誰かの声がするが、それに返事をする力も気力ももう私には無かつた。

ああ、これでやっと終わるのか。

そう思つたら、魔王を道連れにして死ぬのも悪くは無い事のように思えた。

この世界に召喚されて早3年。15だった私ももう18になつた。
「魔王を倒してくれ」などといつ勝手な理由で私を召喚した他力本願な異世界の国に抵抗していた最初の頃を思い出す。

なんでこんな国の為に！と心底思つたものだ。

・・・でも、私は恋をしたんだ。

全てを捨てても良いと思えるよつな恋を。

その人を守るために、彼を生かす為に私は一生懸命、戦つた。

彼と恋人同士という甘い関係になつてからは、彼と共に生きる為に、平和な世界を作る為に、戦つた。

でも、平和な「日本」という国で15年間生きていた私だ。

「恋の為」という感情だけでは戦場はあまりにも辛すぎた。
戦つて、命を奪つて奪われて。疲弊していつた私はやつとのことで
今日を迎えたのだ。

「魔王の封印」

これを作せば、きっと幸せになれると思つていた。
やつと穏やかに彼と生活できると。

・・・でも現実はそんなに甘くなくて。

強大な力を持つ魔王を封印する為に私は全力を注いで、もはや身体
は空っぽ状態だった。

あーあ、私、死んじゃいそつ

そんな虚脱感が身体を包む。

彼と共に過ごしたかった。

彼と共に生きたかった。

なのに、その願いは叶いそうもないのだ。残念すぎる。

泣かないで

哀しまないで

私が死んでも貴方は幸せになつて・・・

そう思いながら力が抜けていくのに抵抗せずに瞼を閉じよつとした
ところで私は見た。

見てしまった。

封印魔法の影響で出来たクレーターの端で

私が恋した彼と

この異世界での唯一の親友と呼べるような存在の彼女が
寄り添い、口づけあつて いるのを。

プロローグ（後書き）

読んでくださいありがとうございました。

誤字脱字などにお気づきになられた場合は、是非教えていただけると嬉しいです。〃

連続投稿します。

『サムライ』（岩波文庫）

読んでいただけたら分かると思うが、基本的に小説は「メモリイ」で構成されています

おはようございます

「ふざけんな————！」

大きな叫び声に覚醒を促され、私はガバリ！と飛び起きた。
ああ、なんて恥ずかしい。自分の寝言で目が覚めるなんて！

目が覚めると一番最初に飛び込んできたのは、薄暗い天井だった。
鍾乳洞のような印象で氷柱のように水晶のような鉱石が沢山ぶら下
がっている。

見覚えのない光景に、？と首をかしげつつグルリと辺りを見渡すと、
自分が洞窟の中の浅い泉の中に横たわっていたことが分かった。

あれ？どうしてこんなとこに私いるの？？？

眉間にしわを寄せて考えて見るが答えは出ない。
記憶を辿るにとも、さっきの夢だか現実だか分からぬ腹立たしい
映像が頭の中にちらついていてどうにも集中できそうにないのだ。

ああ、クソ。夢にしてもリアルすぎだ。
彼は誠実で優しかったし「君は大切な人だ」と言ってくれてたじゃ
ないか。私が疑つてどうする！
私に愛をささやいてくれた堅実な彼に失礼だ。と映像を振り払うよ
うに頭を振つて私は、年頃の女の子とは思えないような掛け声とと
もに立ち上がる。
つまりは、「どうこういしょ」な訳だけど。

立ち上ると、ポタポタと服から雫が垂れ落ちる。

日本に居たころは黒かった、今は真っ白な髪も泉の水によって濡れそぼつていてまさに今の姿はねれ鼠といふ言葉が相応しい。

肌に張り付く服が不愉快で乾かしたくはあつたけど、魔力の全く感じられない洞窟内ではそれは出来そうにもない。深く溜息をつきつつ、私はゆっくりとした足取りで洞窟の中を歩き始めた。

足元はツルツルの水晶でペタペタと反響する足音はどこまでも響いていつて、いまいる洞窟がせまくは無い事を教えてくれる。しばらく無言で洞窟内を徘徊し、わかれ道など無い道をどこまでも歩いていると遠くに光が差し込んできている場所を見つけた。

びつやうじゆうじい。

ホツとしつつ、少し早足になりながら出口から抜け出す。

薄暗い洞窟内に目が慣れていたおかげで、外に出ると目がチカチカする。

瞼を下ろしてしばらく光になれるのを待ち、それに慣れたころ私はゆっくりと瞼を持ち上げ

「・・・・・は??」

硬直した。

洞窟の出口は切り立つた崖のちょうど中にあつたらしく。狭い足場から軽く身を乗り出せば目が眩むような高さだった。地面は物凄く遠い。孤立無援。というか、ホントに何処だこりは。

唚然としつつとつあえずは濡れた服と髪を乾かそうと視線を巡らせて、空中に漂う魔力^{マナ}を使用しようとすると突然ふわりと風が吹いた。優しく包み込むような風は一瞬で私から水気を飛ばし、くるりと空中に形を作る。

『姫様、おかえりなさい。』

『姫様、おはよー。』

口々にそう語りかけてくるのは水色の小鳥を象った風の精霊達。嬉しそうに歓喜の声を上げるそれらに私は苦笑しつつ「おはよー」と返しつつも内心では驚きを禁じえなかつた。

異世界トリップの王道というか、私は素晴らしいチートなのだ。神や精霊、動物たちに変される体质で、日本に居た時と比べると見目も随分と美しくなつていて。自分で言うものなんだけれど、あれだ。絶世の美女ってやつ??

雪のよつて白い髪は微かに銀色を帯びていて艶やかで、瞳は海のよくな蒼穹色。

手入れなんて必要ない程に澄んだ肌は日焼けなど知らないといつような真っ白さで、ともすれば不健康そうに見えると言つて、そんな危うさなど感じさせない清潔さを持っている。

最初、自分の姿を見たときは受け入れられなかつたが数週間もすれば慣れた。もう鏡を見ても驚かないし、お風呂の時も普通に洗える。・・・・うん、最初は直視できなかつたんだよ。自分の身体なのにね。

まあ、そんなことは置いといて。

そんな異世界トリップの王道中の王道な目にあつた私には、チート能力がこれほどか! という程に詰め込まれていた。で一つ目が、精霊魔法が対価なしでほぼ無限に使える・・・ということ。

精霊に愛され体质な私は、普通の人たちが使つような長つたらしいお伺いの呪文なんものが無くても精霊魔法が使える。

- ・・・とこうよりも、精霊達が勝手に私の意を汲んでイロイロいや

つてくれちゃうのだ。

寒いな」と思えば火の精靈達が温めてくれるし、暗いな」と思えば光の精靈が明かりを灯してくれる。

果ては、「ソイツ気に食わない!」と思えば闇の精靈がソイツを闇の中に引きずり込んでくれたり・・・とかね??
勿論、そんなことは望んでいないと懇切丁寧に闇の精靈に説明して吐き出して貰いましたけれども。

そんなこんなもあつたりしたので精靈達に愛され体質な私にとつて、風の精靈達が現れた事はそんなに驚くような事ではなかつた。とうよりもコレは日常の出来事だ。

精靈と私。それは常に一緒に居るものだから、驚くことなんてない。

なかつた・・・・のだが、問題はそこでは無い。

現れた風の精靈達の数が尋常ではなかつたのだ。

空中に無数という水色の小鳥が飛んでいるんだ。流石に驚くよ、こりや。

いつもなら私の願望を聞いて（勝手に）願いを叶えようとして現れるのは2~3匹（匹?）だけ。

精靈達の話によると、あんまり大勢で来ると姫様（精靈達は私を姫と呼ぶ）に迷惑がかかるので順番を決めてそれで來てるんだとか。だから、こんなにも大量の風の精靈を見るのは初めての事だった。視界を埋め尽くすように鳥、鳥、鳥、鳥。
サイズはみんなバラバラで、水色と一緒にいはしてもその色は様々だ。

ああ、綺麗な鳥たちを表現する語彙の少ない私の残念な頭が恨めしい

くてしょうがない。

一際身体の大きな鳥が群れの中から田の前に進み出でくるのをぼんやりと見ながら私はそんなことを頭の中で考えていた。現実逃避だ。分かってる。だけど、私には全くもって今の状況が分かつてないのだから、これくらいさせてくれても良いと想つ。

イメージ的には水色のフュージクスと言つたところか。彼は私の元までくると、ぐるぐると喉を鳴らしながら

『よつやくお田覚めのですね。』

そり、言つた。

優しい声は記憶にあるものと全く変わらずにあって、私は安堵から思わず肩の力を抜く。

「えーっと、・・・・・・おはよう。」

なんと言えば良いのかが分からなくて思わず間抜けな返答が口をついて出た。

とこりか、ねえ、私寝てたの？

つらつらとそんなことを考えていたら、風の精霊神であるブラストは呆れたように器用に肩を竦めて私の頭の上に着地（着頭？）する。精霊だからなのか重さはない。肩は凝らないと思つ。

『何も覚えていないのですね』

覗き込んで来るブラストに「クリと頷いた私の頭の中にぱづつと、何がどうしてこんなところに？」といった疑問がグルグルと渦巻いてくる。

『魔王を封印した直後、姫と魔王は姿を消したのですよ。全く覚えていないのですか？あの戦場に封印魔法の影響で出来たクレーターだけを残して姫は忽然と消えたのです。我ら精霊は姫が生きている事を信じて探し続け、やつとの事でこの洞窟で眠る姫を見つけずつと守護をしつづけていたのですよ。』

ああー・・・、魔王との戦闘は夢じゃなく本当にあったのか。。。

うん？？

ウエーブは? ?

『ああ、ちなみに姫が行方不明になつた数日後にクリスはローズと結婚しましたよ。子供が3人出来て順風満帆な日々を過ごしてましたね、確か。まあ姫の事を散々利用した上に幸せになろうとしていたのに腹を立てたフレイムが國ごと滅ぼしましたから、今はもうその子孫も残つていませんが。』

・・・夢じやなかつた・・・・とな?

なんでクリスはローズと結婚したの?しかも私がいなくなつた数日後つて・・・なに?

いつからローズと恋仲になつてたの？
いつからローズは私を裏切つてたの？

アノコトバト、アノエガオハ・・・ウソ？？

サアッ・・・と血の気が引いていくようだつた。

あまりの衝撃にもう、頭が真っ白だ。

問い合わせたくても、火の精靈神であるフレイムが先に滅ぼしてしまつたらしい。

いや、まあ、話聞いたら私もぶちギレでそれくらいはやりそุดけど、余計なおせつかいではある。私にぶん殴らせろ、と言いたい。

『更にちなみに。フレイムを擁護する訳ではありませんが、滅ぼさなくとも姫は500年という人には長い時を眠り続けていたので例えフレイムが滅ぼさなくとも少なくともあの2人が生きて再び姫と会う事は無かつたでしょうね。フレイムとダークは事の詳細を知っているらしいので詳しい話は2人に聞けばいいでしょう』

・・・・・前言撤回。フレイム、よくやつた。

詳しい話は今度聞くにしても、なんか私の勘が告げているのだ。胸糞悪い話ダゾ とね。

ならばお礼こそ言えても恨み事などフレイムには言えまい。そう思ふくらいには私、お腹の中黒いからね。

といふか私500年も寝てたのかー。実年齢518歳？お婆ちゃんにも程があるだろう。

「まあ、クリスの事は後でいいや。腹立つから今は考えたくないし。・・・とりあえず、ここ何所か分かる?」

『ここはアウエイズの森の一角です。』

人間誰しも切り替えが大事だよね。混乱のしそぎでショートしたとも言つけど。

プラスチの言葉になるほど、崖の下に見えたあの森はアウエイズの森だったのかと納得。

アウエイズの森とは、私が召喚されたベリオ王国からだいぶ離れた場所だ。

一度だけ。たった一度だけ魔王討伐の旅の途中で立ち寄った事のある森で、神と精霊の住まう神聖な森。

あの時は、神に愛され(以下略)のお陰で大変な目にあつたのだがまあそんなことは今は問題ではない。

それにもしても、アウエイズの森は確か戦場から大分離れた場所にあつたはずだ。

私の記憶が正しければベリオ王国を挟んだ正反対にある場所なハズ。

あ、何で魔王討伐の旅の途中でそんな場所に行つたのかは今は割愛させていただくな。いつか語る事もあると思つし。

とにかくにも。何で私はこんなトコに??

プラスチは私のその質問には『すぐに分かりますよ』と言つただけで教えてはくれなかつた。

このいじわるめ。

『ひとまずは、下に降りまよつか。皆も一先ず下がりなさい。そろそろ姫に会えない鬱憤で爆発しそうな他の精霊神がいることです

しね

プラスストはそういうとバサリと翼を羽ばたかせて風を起こし、私の身体をふわりと浮かばせた。

風の精靈達は多少不満そうにしながらも口々に『姫様、またね』『何かあつたら呼んで』『なにも無くても呼んで』と囁いて風にその姿を溶かしていく。

おい、最後の言つたの誰だ。何の用もないのに呼ぶつてどんな状況か10文字で私に説明しなさい。

「うん、みんなまたねー」

精靈達の姦しい声にぱいぱいと手を振った私は、皆が風に溶けたのを確認するとプラスストの精靈魔法で起こされた風に乗つて数十メートルという高さのある足場から飛び降りた。

危なげなく着地して思わず体操選手のようにポーズを決めてから、ハツ・・・と気付けば案の定プラスストが変なものを見るような目を私に向けていた。

は・・・・恥ずかしいっ！

日本にいた頃はこれをやるとノリの良い友達が「わー」と心の伴わない歓声と拍手をくれたものだが、こちらではポーズの意味が通じないので頭の中を心配されてしまうのだ。

私は正常だ！－！と訴えるがそれすらも哀れむような目で見つめられ、いたたまれなさに私はぐつ・・・・と唸る。

「いつ・・・・今はねつ、私のいた世界では意味のあるポーズで『そんなどうでもいいですかから他の精靈神を呼んでください。暴走寸前ですので』」

言い訳のようすにボーズについて説明をしようとしたらバッサリと切れました。

ええ、それはもうバッサリと。

頼むよ、弁解くらいさせてくれと言いたいところだが暴走寸前という聞き捨てならない言葉に私はその心の声を無理矢理飲み込んだ。

頭の中が残念な子だと勘違いされるのと、この世界の崩壊阻止だったら優先すべくは勿論……

勿論……世界の崩壊の阻……って、あれ?よく考えてみたら私、別にこの世界壊されても困なんぬ?むしろ清々する力モ?

超ブラックな思考が頭の中を一瞬過ぎたが、微かに残る良心で心惹かれるその案を宇宙の彼方に放り投げておく。
やううと思えばいつでもやれるのだ。本気でぶちギレた時の為にその手段は取つておこうと思つ。

「ダーク、レイ、シー、フレイム、ライト、グラン。みんな来てー」

なんとも間の抜けた召喚方法もあつたものだと昔、笑つたのは一体誰だつたか。

精霊に愛され（以下略）な私にとつて召喚魔法なんてあつてないようなものだと確かその時は反論した気がする。
だつて皆勝手に来るんだから。

でも精霊神達は例外で、彼らは昔私とした約束に従つて勝手に出てくるといふことを絶対にしない。

それは『呼ばれないと出て来ない』という一方的な約束。

彼らは一様に過保護で、常に7人（さつき「ブラスト」が入つて言つてたので匹から変更。なんか今更な気もするけど）の精靈神が共にあらうとするのに呆れた私が無理矢理結ばせた約束だった。
それを律儀に守っているのだ。ただの口約束なのにみんな、真面目ねーと思つてしまつたのは内緒だ。

精靈つてこいついうところがやつぱり良いと思つ。

みんな思いやりがあつて優しいし、人間とは違つて誠実だ。まあ、
私限定で、だけど。

私の呼びかけに空気がぐらりと揺らぎ、一瞬で目の前に6ひ・・・・
・失礼、6人の精靈が現れた。

おはようございます（後書き）

長くなつたので切りました。
続きを読まねば明日・・・かなあ??

矛盾点が見つかった為、軽く訂正しました。（5月25日）

・・・お久しぶりです？（前書き）

お気に入り登録されている数と閲覧数が小説のページ数と比べると
凄い事になつてて（＼＼＼＼＼）ナゼニ？とか思つてたら
まさかの日間ランキングの17位とか19位とかの位置にいたとい
うwww

だれかこの状況を詳しく私に説明してくれww

主人公的には、眠りにつく前のことは昨日の「ト
なのに周りにとつては500年ぶりの再会www

・・・お久しぶりです？

さて、一人ずつの特徴を説明するわね。

ダーク 閻の精靈神

見た目はグリフォンに似てる感じ。

まあ、全身これでもかってくらい真っ黒なんだけど。

レイ 光の精靈神

見た目はもうペガサス。羽生えた白馬だよ、白馬。

真っ白で、額には透明な円錐形の角がある。

シー 水の精靈神

見た目は青い大蛇。

海みたいな蒼色で、背中には背びれみたいのがあって、水陸どっちでも生活可能・・・らしい

フレイム 火の精靈神

見た目は深紅の虎つて感じ。

乱暴で喋り方はヤンキーっぽいけど、凄い気が利く子。

ライト 雷の精靈神

見た目は大きな狐っぽい感じ。ふわふわな尻尾がお気に入りデス
でも中身は子供。ガキンチョ

グラン 大地の精靈神

見た目は熊。おっきな熊。大きな肉球は愛すべきものです。

ちなみに、言うとシー以外はみんな男。

まあ、精霊に性別なんてあって無い様なものだから性格とか声質とかに限った話・・・なんだけど。

ちなみに人型にもなれるんだけど、私が動物大好きだから皆意識して動物の姿をしている事が多い。

一回、「なんであんまり人型にならないの?」と試しに聞いてみたら『そっちの方が姫が抱きついてくれるから』と言われて二の句が継げなくなつた。

いや、体格の良い見た目イケメン成人男性に（女性体のシーと子供体のライトにはよく抱きついてたんだけど）可憐な乙女がおいそれと抱きつく訳にはいかないでしよう?と心の中で反論してしまった私は絶対に間違つてはいなはず。

まあそんな理由で、動物姿になるよう心がけ始めたシーとライト以外に私が心奪われ、抱きつかれなくなつたシーとライトがそれに嫉妬してつられるように・・・と今のような状況に至つている。私に言わせれば実にくだらないのだが、精霊神達にとつてはとても大事なことらしい。

・・・・閑話休題。ちょっと長くなつたけど。

目の前にズラリと並んだメンツに私は呑気に「やつほー」と手を上げた。

私からすればちょっと前まで一緒に戦場で戦っていた感覺なんだけど、昔からすれば会うのは500年ぶり。

精霊の生の長さから考えればたつた500年・・・のはずなんだけど、なんだろ?。眞田が怖いよ・・・。

『・・・姫、やつと目が覚めたのか』

『心配したよ、体調は大丈夫?』

『ひーちゃん、心配したわよーー!』

『たつぐ、寝すぎだつづーの』

『起きんのおっせーよー!んの、寝ぼすけめーー!』

『心配したぞ、姫。もう大丈夫なのかー?』

順にダーク、レイ、シー、フレイム、ライト、グランだ。ブラストは沈黙を貫いている。

よしよしと大きな手（前足?）で頭を撫でてくるダークに、「え、あれ、皆結構マジで涙目?」と私はうろたえる。

ツンデレ性質のあるライトですら涙目なのだ。随分と心配をかけてしまつたようだと不可抗力とは言え500年も眠っていた自分を反省する。

・・・・するよ。うん。反省するする。

だから、6人全員で説教するのはやめてちょうだいーー!

再会を喜ぶ言葉から一転、いつのまにか『あんな国のために・・・』とか『あんな男の為に・・・』とか『あんな危険な魔法使うなんて

無茶を・・・』とか寄つてたかって説教をし始めたのだ。

ぐちぐち言われる責め句に流石に罪悪感も薄れてくるつてもんだ。
五月蠅い、黙れ。とまでは言わないけどさ。ちょっと、しつこくな
い??

「心配・・・かけて『めんね??」

あまりの口五月蠅さにうんざりしてきた私は意識して可愛らしく小
首を傾げて僕く微笑んだ。全員がグツ・・・と詰まりこむ。

秘儀、僕い美少女スマイル!!

・・・・ネーミングセンスが無い事についてはスルーでよろしく。
うん。

7人全員、みんなして基本的に私には甘甘なのだ。ちょろいちょろ
い。

言葉を無理矢理呑み込んだ風な精靈神達に私は、殊更分かりやすく
シュンツ・・・と頃垂れてみせる。

ふふっ、私は女優なのよー演技なんてちょろ・・・・・・ちょろ・
・・・あれつ?
・・・・えーつと??

みんないつの間に人型になつたの・・・カナ??????

「姫、泣くな」

「『めんね、言いすぎた』

「ひーちゃん、ひーちゃん!!泣かないでえー」

「おわつ、姫、『めん!』」

「なつ・・・何泣いてんだよーー！」

「『』めんよ、姫。頼むから泣かないでくれ」

「あーあ、泣いてしまったじゃないですか。勢いよく迫りすぎです
よ」

いや・・・泣いてないし。

今まで沈黙を守っていたブラストですが、無責任にもそんな事を言つて煽るから更に慌てる人々。いや、ていうか何故にブラストまでもが人型にｗｗ

なんかものすゞーーく顔を上げづらい状況になってしまった。
壊れ物を扱うかのような優しい力で私を抱きしめてくるダークの胸
に額をグリグリと圧しつけて、私は顔を隠す。

説教から逃れることには成功したが、次に来たのは慰めの嵐。
すんません、演技でした。とは言いだせない皆の心配そうな声に罪
悪感がグサグサッと胸に突き刺さつてくる。

そうでした、みんなこんな子でした。と最近（私にとっては）の殺
伐とした空氣の中で忘れていた事を思い出す。

思わず遠い田をしてしまったのは誰にも責められないだろう。

ダークの胸の中で慰めの嵐とグサグサ突き刺さる罪悪感に耐え抜いた私は今、アウエイズの森を歩いている。

7人の精霊神を引きつれて歩くのは本意ではなかつたけど、誰か1

人を残して他の全員を精霊界に戻そうとすると森が滅びそうだった
ので諦めた。

本気でお互いに殺意を飛ばしてゐるもんだから、流石の私も本気を読む。

目的地は、アウェイズの森の最奥部。

和が熙としていた洞窟のあたり崖もたがながは森の奥深い場所はあ
たらしく、歩くのは苦ではない。

姫、歩かずとも私たちの背中に乗ればすぐに着くんだぞ?』

「そ、たゞ遠慮する必要は無い」

その短い脚でちよびちよび歩いてたら次の田になづかまへや』

等と五月蠅い外野がいるが、こいつらの背中に乗るとちょっと厄介な事になりそうだったので丁重に遠慮させて頂いた。理由はいろいろあるけど、ここでは割愛。これも今度詳しく話す機会があるでしょう。

歩き進める。
目印なんて無い木ばつかりの場所だが、迷うことは決してない。
なんであって、そりゃあ

『うわあー！姫ちゃん、うれしかったー……』

という盛大な呼び声が森の奥から響いているからだ。

ああ、なんて神聖とかを丸ごと無視したような声だろうか。これが人々に「慈愛と美の神」と呼ばれる神かと思うと頭痛のする

思いだ。

「レディ、五月蠅い・・・」

米神に指を当てて深い溜息をつきながらも声を頼りに歩いていると、唐突に視界が開け、目の前には空に『届いてるんじゃないか』と疑つてしまつくりに大きな樹が鎮座している広場に到着した。

『キヤーッ！相変わらず可愛いわね、姫ちゃん！心配したのよお？？？』

駆け寄つてくるのは、緑色の髪の美人。

彼女こそが先ほどの大声の主で、「慈愛と美の神」などと私からすれば、「分不相應すぎるだろう」と言う印象な二つ名を持つ女神様だ。ここに来る途中で軽く精靈神7人衆に聞いたところ、魔王封印後に魔力マナとなつて空氣中に溶けて消滅しそうになつた私をレディがかき集めてくれたんだとか。

でレディは、私を一人占めできるようと心配性な精靈神達に私が無事な事を秘密にしたまま、私が眠れるようと静かな洞窟に寝かせて500年守り続けてくれたらしい。

いや、突つ込みどころがいろいろとありますぎてアレなんですけど。しかもそれを意地で見つけ出した精靈達も凄いと思う。割かし本気でレディは私を隠そうとしたらしい。

「レディ、助けてくれたんだってね。ありがと！」

『姫ちゃんがいなくなるなんて嫌だつたんだもの！ジェイルとキルアも手伝つてくれたのよ！』

ジェイルは生命を司る神で、キルアは運命を司る神。最高神と呼ば

れるそ^{うそ}うそたるメンバ^ーに心底呆れてしまつ。

なんていうか、ホント規格外だな、自分。と思わずにはいられないのだ。

それもこれも神に愛（以下略）・・・いい加減略すのも面倒になつてきたな・・・。

・・・お久しぶりです？（後書き）

読んでくださいありがとうございました
それでもって更新遅れてすいませんでした。○'z
次の話は早めにうｐ出来るように頑張りますwww
誤字脱字、文章の矛盾点などに気付かれた場合は是非ご指摘くださいませ

ちなみに未だに主人公の名前が出て来て無いのはただ単に名前が決
まってないか。ry・・・・げふんげふん

そして早速手直し

内容的にはあんまり変わつてません

13・36手直し完了

女神様つて意外といいなもんです。（前書き）

超短いです・・・

上手く区切れない私のミスorz

次話を今日中に更新出来るよつに頑張りますので、ご容赦ください・・・

女神様つて意外とこんなもんです。

大樹の太い根っこに腰かけてレディの話を聞いていた私は、ふむ。と顎に手を当てた。

レディ曰く、500年経つて随分と人の世は変わったんだとか。

まず大きく変わったところは、人が精霊魔法を使えなくなつた所にある。

これについては聞いた瞬間に「やつぱりか」という感情しか生まれなかつた。

私はLOVEな精霊達が、私を散々利用した人間に力を貸す訳が無いのだから。

で、精霊達と同様に神と聖獣達も人間に力を貸すような事をほぼしなくなつたんだとか。

これも精霊達と同様の理由なんだつてさ。

義務的事はやるが、過剰な恵みを与へなくなつたらしい。

本当は何もしてやりたくないんだけどというのが本音。でも創造神ゼロフトがそれはさすがに・・・と渋つたらしい。

不満そうにそう語るレディに「そうかいそうかい」と適当に空返事を返しつつ私は唸る。

ということは、だ。

前々からチートだったというのに、今は更にチートな訳だよね？私つて。

神様と精霊と聖獣全部が味方で人間が使えなくなつた精霊魔法も使用可で、魔力許容量が無限大。つまりは魔法も精霊魔法もいろいろと使い放題。

・・・え、もうこれって人間って言えなくない??

試しに火よ灯れーと心中で念じてみたらポツと人差し指の先に小さな火が灯った。

見れば、嬉しそうに私の指先に火を灯しているのはどこから現れた名も無い小さな火の精靈。

フレイムは自らの眷族を羨ましそうに見てている。

・・・おい、何自分の眷族に嫉妬してやがる。

精靈に「ありがとう」と微笑んでお礼をいってから私は、更にふむ。と唸る。

精靈魔法は使える。まあ、プラスチック達が今一緒に居る時点で使えない訳がないのだけれど一応の確認もおつけー。

他に変わったところは?と尋ねた私にレディは『いっぱいあるわよー。上げ出したらキリが無いくらいには』とあっけらかんと笑つて見せる。

この世界と人間に興味は無いけれど、生きていくためにはこの森の奥深くにずっと引っ込んでいる訳にもいかないだろう。

なにしろ私は科学技術の進んだ先進国、日本に生まれた現代っ子なのだ。

森の中で原始的な生活・・・なんて御免こうむりたい。

精靈達がいれば森の中でも楽で最上級の生活は出来るだろうけどヒモ生活なんてもまっぴらごめんだ。

私は私の力で稼いで精いっぱい贅沢したいのだ。

悩んでいる時間は数秒だった。

うん、森、出ようか

なんて簡単に結論を出した私は必死に引きとめようと暑苦しく懇願するレディを文字通り足蹴にして（レディはドムなので滅茶苦茶喜んでいた。キモイ）、召喚魔法を発動させる。

これまた何の問題もなく発動した魔法によつて喚び出されたのは、リオルと私が名付けた強大な力を誇る始祖ドラゴンという種族の生き物だ。

真珠のように七色に輝く純白な色の鱗の西洋風ドラゴンのリオルは、私専用のアッサー君第一号。

始祖ドラゴンは気高く誇り高いので普通は人を背中に乗せたりしないのだが、言わざもがな私は例外中の例外。

ちなみに精靈神達の背中に乗らないのもこのリオル君が理由だったりする。

私専用のアッサー君達は、自分達以外に私が乗るのを決して良しとはしない。

寧ろ、全面戦争を勃発しようとするとくらには嫉妬心をむき出しこするのだ。

一回、ダークの背中に乗せてもらつた時はリオルと陸上用アッサー君こと銀狼のルガが激怒して森一つが吹っ飛んだことがあった。なまじお互いが強大な力を持つていてプライドも天に届く程に高いもんだからどちらかが滅ぶまではやめない・・・と灼熱してて、私が「やめないと一度と口利かない」というアレな発言を言い渡したことによつてやつとお開きとなつた。

あの時は弟妹の喧嘩を仲裁してやつてる気分だつたわ。

生きた歳月からすれば大分私よりも年上なハズなんだけど、なんですか？年上の威儀とか感じた事一切ないわ、私。

クルル・・・・

頭を下げる私にすりすりとすり寄つてくるリオルの頭をヨシヨシと撫でてやつてから私は、私の足元でハアハアいつていたレディを渾身の力で蹴り飛ばした。

森の中の木をなぎ倒しながら吹つ飛んでいくレディを尻目に、戻つてくる前にとつとと移動してしまえトリオルの背中に飛び乗る。シー・フレイム・ライト・グラン 飛べない精霊神組も同じようにグランの背中に飛び乗り、飛べる組プラス・ダーク・レイ トリオルはバサリとそれ翼を広げる。

爽やかな風が吹く中、静かな旅立ちに私は唇をキュッと噛みしめた。

今度は、人間なんかに心奪われたりしない。
私は私の為だけに生きてやるんだから。

そう密かに心に決めて、飛び立つ合図としてリオルの背中をポンポンポンと三回叩いた。

『まつてえええええ！私も一緒にいいいいい！…！』

早々に復活したらしいレディの声が響いたがそれを軽やかにスル
ーして、私たちは旅に出た。

女神様つて意外といいなもんです。（後書き）

・・・・・・・・・短くてすんません。これ
そもそもでのつりなので、多分手直し入ります（・・・×・
）

逃げるが勝ちってホントかな（前書き）

まず最初に言わせてください
ごめんなさい！

と

次話投稿が今日ついでにここに」と…と自分でも思わなくもないんですけど…。
これ以上言つてもただの言い訳ですね。ホント更新遅れて申し訳ないです…。

逃げるが勝ちってホントかな

「リオル、お疲れ様ー。ありがとねー」

キュウン

アウエイズの森近くの村まで飛んでくれたりオルを還して（どこに還るのかを私は知らない。）、私はいま仁王立ちで立っている。目の前にはボロボロになつた7人の精霊神達。ここに来るまで、いろいろとあつたのだ。

そう、いろいろと・・・・・・・・あ、思わず涙が。

今までの苦労を思い出すと心が荒む。
なんで森から街まで移動する短い時間の中でこんなに苦労をしなきゃいけないのか。

ほんと、私が一体何をしたつて言つんだ。

「ほんと、良い迷惑。新しく約束作ろつか???

そう脅す私に怯える面々。

私の目の前にシュンツと俯く7人の更に向こう側に見えるモノには更にピキッ・・・と額に怒りマークを浮かばせる。

そこには、村がある。人間が住む名も無い小さな村だ。

私の知る世界は今より500年前だから、この村の事など勿論私は知らない。訪れた事も無い。

だからこの村の人も私の事など知らないだろう。知る訳が無い。

な の に

何故か村のど真ん中に彫像があるのだ。
精巧な、人の手では到底造れないような私そっくりな淡い水色の彫
像が。

なんだこれは。と硬直する私を置いて、盛り上がる面々。
曰く

『この村を担当したのは私なの！姫そっくりで綺麗でしょう！？』

『いや、俺が作ったあの国の彫像の方が姫に似て可憐で美しい！』

『そんなことない、俺が作ったあの彫像が一番姫の清廉さを表せて
いる』

云々。

愕然とする私を置いて果ては『誰が作った彫像が一番か』等と論争
し始める始末なのだ。

・・・おい、ちょっと待て。これは何の嫌がらせだ。
と突つ込む隙すらない。というか、突つ込む気力すらない。

この場では唯一の味方であるリオルが「真っ白」というリアル彫像
と化していた私を突つつく事で正気に戻してくれたが。
で、ぶちギレた私が魔法を発動し、冒頭に戻る訳だ。

この彫像を私が発見する前にも移動中、イライラボルテージが上が

る要素が色々とあつた為にもうホント大爆発つて感じで上級魔法が炸裂して。

魔法は精靈神をボロボロにしてくれたんだけど、それでも私の腹の虫はおさまらない。

ふざけるのも大概にしろ。

何が楽しくてこんな羞恥プレイに耐えなければならないのか。

しかも、何? あらゆる村や国という場所にこれがあるって?????

死んでくれ

死刑だ。精靈に死は無い?

ふふつ、そんなん知らん。私が引導を渡してやんよ?????

殺氣満載で微笑む私にビビる精靈神。・・・シユールだ。

「クソ馬鹿共めが。いい??あの像、それぞれが責任を持つて破壊してきなさい!」

「そんな!!--全部良い出来なのよ!??」

「姫、そんなこと言ひなつて。全部姫にそいつりで快心の出来な

「じゃかわしい!!--グダグダ言わずにとっとと行け!!--」

悲痛な声を上げるシーとフレイムが抗議の声を上げてくるが、そんなのは知った事ではない。

むしろ、快心の出来なのが問題だと私の心中は暴風が吹き荒れる。なおも彫像の良さについて言い募るうとするやつらに風の魔法を発動してそれを吹っ飛ばすと全員が逃げるよつこにして去つて行った。

「『めんなさい！』と風の中に謝罪の声が聞こえた気がしたがそんなもんは価値がない。

行動で示せ、行動で。

この阿呆共め。

フンッ。と鼻で荒く息を吐いた私は、ふと視線を感じて振りかえった。

そこには5人くらいの冒険者らしき人々。

やつべ

み ら れ て た

精霊達曰く、今の時代の人たちは精霊が見えない・・・らしい。

恩恵に見放された人間達は、精霊や神々を信仰をする者は少なくな
り、よつて見る力を持つ者もほぼいない。

精霊魔法が使えなくなり、後は退化するだけ・・・という現状に慌
てている人類にとって今は魔法だけが頼りの綱云々と確かレディも
言っていた。

まあ、つまりは何が言いたいかと言つと。

問題はこの人たちにとつて今の私と精霊神達の会話がどう見えるか
という事なのだ。

私は精霊達に向かつてどなり声を上げ、癪癩を起して魔法を発動させてた。

・・・でも精霊達が見えない彼らにとつてはどう見える？

何もいらない空間に向かつて、怒鳴りつけて、・・・少なくとも、普通の人間が打てないような上級魔法を何もしない空間に発動させてる頭が沸いてる女?????

・・・・・わーお。文字にしたらかなりイタくない??
私だつたら無視する。なんか変な人がいるなー程度で、レッツスルーだ。

だつてなんか巻き込まれちゃいそудだし。

その痛い人つて思われるのが私つてのが問題だけど、まあ、そこら辺は置いとく。

今更人間になんと思われようと痛くも痒くもないし良いよ。うん。いい。

でも私の精神的な健康上にはよろしくない。

ああ・・・さつさと去ってくれ。なんと思われていようといふから、早め早めに私の視界から消えてくれ。

大丈夫よ、今度からはこれを教訓に気をつけねばいいんだから。
むしろ、街中やら国のだ真ん中でやらかさなかつた辺りまだマシよ。
うん、マシ。マシだと思え、私！

あまりの羞恥に顔を両手で覆つて、私という怪しい人物から彼らが遠ざかつてくれる事を切々と願つていると

「信じられない・・・！」

という誰かの声が聞こえた。

そんなに私が珍しいか。誰もいない空間に向かつて上級魔法を炸裂させていた私という変人が。

存在までも信じられない程に？いや、別にイイケドサ。

「お気になさりず、素通りでござつた」

卷之三

あーあ、穴でも掘つてしまおうか。んで、じまらへそこで暮りやの

今度は500年と言わず1000年くらいや、寝よつか自分。この羞恥が薄れる頃に出てくれれば言いたいんだ。

「今の時代に精霊と会話できる人がいるだなんて・・・・! ! !」

つて・・・・・・・・・ハイ???

あんたーてえ？？？？

頼むもう一回言ってくれ

私のぐちゃぐちゃ思考の隙間に這こじこんで来た声はなんとも澄んでいました。まる

おもう、イケメンホーリーなどと塙達にはも考へてしまつたのは立派な現実逃避だ。

なんだつてこんな面倒なことに・・・と冷静な自分が頭の隅っこで呴いていたが、そんなのは今更だ。

予想外の発言に、あれ？この人この世界にいる数少ない「見れる人」

の内の人なの？？と馬鹿みたいに戸惑う私。

見えない事で誤解される事により感じる羞恥心と、見える事によつて訪れるかもしない厄介事。

どっちが私にとつては面倒なんだろ？？

・・・後者だな。間違いなく後者だ。

誤魔化せ、誤魔化すんだ私。

頭がおかしい子を装うんだ！

もう一回なにも無い空間に魔法をぶつ放して「おのれ、魔王め！私が成敗してくれる！」とか何とか言えば、きっと相手も遠ざかってくれる！！

「すみません、是非お話を・・・」

「だが断る！..」

即座の否定後、ハツとして口を覆つても時はすでに遅い。

誤魔化す事も忘れて相手の発言に素直に反応してしまうとは何事か。しかもノリで。

後悔先に立たずとはまさにこの事。

「ルガ！..！」

猫の手も借りたいこの状況に迷わずアッサー君第一号を召喚した私は、召喚陣を伴つて現れた巨大な狼の背中に即座に飛び乗る。誤魔化すとかもうどうでもいい。逃げろ私。世界の果てまで。

「何処でもいいから、人のいないとこに行つてしまえ！..」

なんとも無茶苦茶である。

なんだらつな、この展開・・・と思わなくもないけど、それも今更だ。

私の指示に遠吠えで答えたルガは、強く地面を蹴つて走りだした。

逃げるが勝ちってホントかな（後書き）

・・・・なんだろうな、この展開。は私のセリフだwwwwww
ちよ、どうしてこうなったwww

「この世界にも凹凸の概念はあるの?」(前書き)

連續であつぱ~

文章の長さも頑張った方だと思つ(。 。) - !
頑張つたよ! ほめて、ほめて! - !

あ、それとお礼を言わせてください (*、 *)ノ
皆様のお陰でPVが26,770アクセス、お気に入り登録が29
1件になりました!!

しかし、それにしても何でこんな小説が・・・(・・・)・・・(・・・)

ゴクリ

「この世界にも厄日の概念つてあるの??

私を乗せて走つてくれたルガは私の要望通り、人のいないとこを
目指して駆けてくれた。

駆けてくれた・・・・のは良いのだが。

「うーん・・・・。私的には人間的な生き物全般のいない場所つて
意味だつたんだけどねえ。・・・」

どこか天然要素のある我がアツシーキューノ号はそのド天然さを發揮し
て、とある国に連れて来てくれた。

見た事もないし聞き覚えもない国名からしてあの戦争からの500
年の歳月の間に建国された国である「」とが伺える。
勿論、国だから国民がいる。
でも、それは人間ではない。

・・・・じゃあ、何が住んでるかという話になるのだが。

この国に住んでいるのは一般的に「獣人」と呼ばれる種族になる。
獣人にもいろいろと居るのだが、ここでは一括りで纏めて説明させ
て頂く。面倒だし。

この世界的認識では当然の如く人間ではない・・・が、姿形は人間
に耳やら尻尾やら羽が生えたものでしかないのだ。
ぶつちやけ、私に言わせれば人間とあまり変わらない、ということ。

国を治める王が獣人なら、國を護る騎士団も全て獣人。国民もゼー

んぶ獸人。

人間は入国不可！・・・・という訳でもないのだが獸人は人間を恨んでいる傾向にあるらしく、ここに不用意に人間が入れば袋叩きにされてしまう・・・かもしけないんだとか。これ、レディ情報。確かにこれだつたら人間はいないだろう。ルガは間違つてない。うん、私の言葉を馬鹿正直にそのまま実行に移しただけだもんね。それできょーっと私の考えの斜め上方向に行つちゃつただけで。

さて、この獸人という種族だが、

人間に比べて運動能力やら見かけが優れている傾向があるせいでの、昔（私が（起きて？）いた頃）は奴隸として扱われることが多かつた。

なぜ、優れている獸人が奴隸と言う立場に甘んじていたかというのもとある精靈魔法のせいだつたりする。

その精靈魔法というのが本来は幻獸や、神獸と契約をする際の補助に使うものだつたのだが、どこでどうひん曲がつてしまつたのか、とある魔術師がその精靈魔法を元に「獸人を縛る」魔法を開発してしまつたのだ。

あの頃の精靈は良くも悪くも純粹で、人の営みに関してはかなり無知だつた。

しかも、下位精靈だ。何が良い事で何が悪い事か等知る由もなく。。

魔術師に請われるままにその魔法を獸人に発動してしまい、気付けば獸人は全世界で奴隸として良い様に扱われるようになつてしまつていた。

私が召喚された頃なんかは、それはもう酷い状態で獸人からすれば地獄でしか無かつただろう。

男の獸人は戦争や雑用にこき使われ、女の獸人は人間に比べれば見目が良いのが多いのが災いして性奴隸として酷い扱いを受けていた。

ああ、懐かしい。召喚されたばかりの頃、全てに抵抗しまくつていつた私は暴走の中でその現状に吐き気を覚え精靈達を癪癪ついでにハつ当たりのように怒鳴り飛ばしたのだ。

「無知な事は罪と知れ。知らないからと言つてこんなことは許されないんだ」と。確かにそんな事を言つた気がする。

今思い出してみると、なんか芝居がかつてている気がする、ハズカシイ。

・・・・暗黒の記憶だな、よし、封印しどこへ。

まあ、とにもかくにも。

言われるがままだつた精靈達を怒鳴り飛ばして、ついでに獣人を慰めやらに使用している私を召喚した国の阿呆共もぶつ飛ばして、私は奴隸たち全てを解放した。

二度とその精靈魔法が使われない様に、精靈達にキツク言い渡し、ついでに「呪文を唱えたら唱えた人間の一族ごと滅ぼす」と全人類に向けた脅しもかけた。

いやあ、あの頃は若かつたな、私。生かしてやるなんて優しすぎでしょ。

・・・・閑話休題。話思いつきり逸れたなあ・・・・。

ルガが連れて来てくれたのは、そんな獣人達の国。

確かに、自分たちを良い様に利用していた人間なんかの国に居たくなんかないよねー。

うんうんと頷いてしまうのはとても他人ごととは思えないからだ。ちなみに、そんな獣人の国と人間の国は険悪で戦争中・・・・と言う訳ではないそうだ。

またまたレディ曰く、獣人達の国のトップは「人間と争うのも馬鹿馬鹿しい」という考え方らしい。

大人だなーと感心せずにいられない。

くうううん・・・・

頃垂れて背中を大きく丸めているルガを撫でながら私はつらつらとそんなことを考えていた。

私の「お願い」を上手く叶える事が出来なかつたのが悲しいらしいルガはずっとこんな調子で話しかけても「くうううん」としか言わないのでだ。

「ルガ、そんなに落ち込まないで。」

ぽんぽんと背中を叩いて慰めてみるが相変わらず浮上する気配は無い。

私の言葉が足りなかつたのが悪いのであって、ルガは全く悪くないのだけどねえ。

「あの痴態を見ていた人たちから遠ざかれれば何処でも良かつたのよ。だからルガ、そんなに気にしない気にしない！」

くふうん・・・

駄目だ、これは。。重症だ。

どれだけ慰めて見たところで、ルガは結構頑固なのでじばらくは浮上しないだろう。

早々に諦めた私はルガを見守ることにして（還すのもアリだが、一人は何となく嫌なので）、獣人の国に入国する事に決めた。

獣人達は人間に比べれば全然まともだ。

喧嘩つ早い・・・という難点もあるがそれには個人差があるし、質の悪さから言えば人間の方が扱いづらいだろう。

「さつて、入国できるかなー？つと」

奴隸から解放された獣人達が作った村に私は獣人の救世主として出入り自由だったのだが、しつこいようだが500年だ、500年。自覚は無いが現実、私の常識は500年前のものだ。通じるのか？・・・・通じないと思つんだが、どう？？

きゅうん？？

私の自問自答にルガが何？と言わんばかりに不思議そうに首を傾げている。

気にしなくていいよー。と伝える為にわしわしと首元の柔らかい毛を撫でてやる。

悩むだけ無駄だ。

行ってみて追い返されるなら素直に下がればいいし、入れたら入れたでご飯食べて宿とつて寝ればいいし。

困る事は特に無いし、入国できても出来なくても問題はない。となれば特攻あるのみ！よね。

・・・結論から言おう。

入国は出来た。でも、問題は大有りだった。

というか、問題しか無かつた。なんぞ、この状況は。。。

こんな事になるなら追い出された方がまだマシだつたと思う。贅沢せずに寛宿すればよかつたと激しく後悔。

私は「はふう・・・」と溜息をつくしかない。

目が覚めてから一日しか経っていないというのになんだというのか。厄日か？ そうか厄日なんだな？？？

精神の安定の為に落ち着いた風に傍らに佇むルガを力の限り抱きしめる。

全力で抱きしめているというのに、ルガは苦しそうな素振りを欠片も見せない。むしろ嬉しそうに尻尾をブンブン振っている。癒されるよ、るーちゃん。とゆづか、アッサー君達だけなのかね、私の味方は・・・。

今この状況、私には理解不能だ。

だって、12~3人程が私とルガを囲む様にして跪いてるんだよ？？
そう、跪いているのだ！

・・・大事な事だから二回言いました。

どうしてこうなつた。いや、むしろこうなるべくしてこうなつているのか？？

「ようじでお越しくださいました、我らが救世主メシア」

そう、跪いている獣人の一人が言う。丸い耳にふわふわの金髪と尻尾。多分、獅子の一族かな？

・・・・てか、何所かで聞いた事のあるセリフだなーと思つたらあれば、召喚直後にあのいけすかないベリオ王国の王に言われたセリ

フにそつくりだ。

おっけー、わかった。これは嫌がらせなんだな？

獣人の国を滅ぼしてしまえ という神のお告げなんだな？？

『そんな事言つてなつ・・・』

レディの声が頭に響いた氣がするが華麗にスルーだ。

勝手に頭の中で喋つてんじやないよ、カスガ。

どいつもこいつもホント、良い根性してる。許すまじかな。

それにして召喚されてから今まで良い事一回でもあつた覚えが無いのだが。

いや、多分あつただろうが嫌な事がそれら全てを搔き消してしまつてている。

なんか、自分が不憫すぎて泣きそうだ。

怒りにふるふると身体を震わせる私に気付いたらしい獣人達が慌てたように何が悪かったのかを尋ねてくる。

何が悪かったかって？？全部だよ、ぜんぶ！

入国手続きの直後攢うようにして城にまで連れて来て置いて「何が悪かったか」等と聞いてくる奴らの神経が知れない。

抵抗しようにも、頭の中でレディが『待つて！ちょ、待つて！！話聞いてあげて！…』等と喧しく頭の中で話すもんだから滅ぼ・・・失敬、抵抗する暇も無かつた。

あ、なんでレディの声が聞こえるかつていうと、私の物騒な考えに勘付いた獣人を気に入っている彼女が私を止めようと躍起になつて念話を飛ばしてきたからだ。

獣人の頭に生えた獣耳やら尻尾がツボなんだつて。・・・正直知つたこっちゃないよ、そんな事。

・・・・で、念話でのレディの話によると私を散々利用した人間が

大嫌いな神々だが、獣人は別なのだそう。

基本なんにでも愛され体質な私に獣人は優しかったからね、多分そのせいだろうと思う。

人間は俗物的な思考がかなり強いが、神獣の血をひく（という伝説がある）獣人達は神獣程ではないにしろとても純粹で誠実だったから少なからず私も信用してたし。

でもそれも結局は500年前の常識だ。

500年後の獣人はその範疇では無いらしいな、と残念に思いつつ全力の抵抗をしようかと魔力を集め始めたところで『ダメええええええええええ！』というレディの叫びが頭ん中に轟く。

・・・・この声が聞こえるのが私だけ、というのはあまりにも酷い仕打ちだと思う。おい、誰かこの苦しみを一緒に分かち合え。

「・・・・五月蠅い、ホントに」

ポツリと口をついて本音が零れた。ちょっと黙つてくれるー？？とレディに対してもうとばかし本気の殺意が湧いた。

私の咳きは極々小さいものだつたのだが耳の良い獣人達には充分な声量だつたらしく、ビクウツ！と跪いたまま彼らが身を竦ませる。咳きはレディに向けてのものだつたのだが、黙つてくれたなら丁度いい。

状況・・・・説明して貰いましょうか？？？？

IJの世界にも厄日の概念つてあるの？？（後書き）

ちなみに、

姫ちゃんの愛され体質は人間にも有効ですが人間は欲にまみれてい
る為、強大な力を持つ姫ちゃんを我が物しつつも良い様に利用しよ
うと躍起になるんですねー
なので姫ちゃんにも姫ちゃんを愛するあらゆる者達にも基本嫌われ
ております。。

勿論、そんな人間ばかりな訳ではないのですが姫ちゃんに近づくも
のはみんなこんなばっかりだった為、今では人間と言つ種族丸ご
と神様やら精霊やらに嫌われてます。

連帯責任つてやつだあね。。

誤字脱字、文章の矛盾点などに気付かれた場合は「J連絡お願いいた
します。

あーんぢ

感想頂けたら励みになりますので是非お願「J」自重W

あ、あと。。

お気に入り登録が300件突破したらお礼になんか閑話をいれよう
かなーと思うのですが、どうでしょうか？？
是非ご意見を頂ければと思うのですが・・・どうでしょ「J」うか？？
詳しい事は活動報告にて書かせて頂きますので、よろしかつたらそ

つちも見て行つてくださいこ)) ページをかく

「つないだN女」の絶対領域の「つだと思ひの（前書き）

サブタイトルに深い意味はあつませんw w

そんでもって、更新遅れてスイマセン。r n

仕事が忙しくてなかなか更新できなくて。。。（。、、。）

。

しかし。。

書いている間に句を書いてるのか分からなくなるとこう不思議――

・

明日ぐらごとに読み返して書きなおします、ハイ。。。。

「いなしうね」の絶対領域の「いだん懸けの

むかしむかし、じゅうじよたぬはにんげんじわことしてらぶこあつかこにやつてこました。

おとじせ、おとせいかつだわね

おんなせせりつめくせらむわねてこたのです。

すべてのじゅうじよせこれむるふにつかれ

ただ、いいなりにならひびをくじてこました。

そんなどひつじがじき、うじよたぬひつじでこたる

あるひ、ゆこじゅわまがあらわねました。

人のかこじゅわまひくへこめくこくのかみ

すんだぬぬこくのをわかつ

せこれこれせとかおれほ止むこれれたやくせこでした。

「いなしうね」のねいふ、らぬれつかいをしたがえたつやくせこくこ
じゅわせ

じゅうじよくのひこぬつかこをこねひなさかなかしみした。

そしていました

「なにもしないこと」と「いとはなんとつみぶかわい」とか。

じゅうじんせしんじゅうのちをひく、けだかきものたわ。

にんげんがいいよつにあつかつていゝものたちではない」

٦٥

そして元気なからいじめ、ハジキをかこせ、ハジキをぬたベヘ
れたのです。

だからじゅうひじんせせこじゅれがをかんしゃをしめたりのよびめす。

「救世主」 も・・・・・。
メシア

獅子族の男から渡されたこの世界での所謂「ひらがな」ばかりの子供向け絵本をぱたんと閉じて私はヒクヒクと頬を引きつらせた。

・・・ 一体誰の話だ、これは。

銀色の髪に蒼色の瞳。私と似通つた点はあるにはあるが、あえて言おう。それも、声高だかに言わせてもらひつい！

・・・・コレ、絶対私じゃない！と。

確かに、獣人を人間から解放した覚えはある。あるにはある・・・・・けどこんな御大層な絵本にされるような崇高な気持ちからでは無かつた。

正直言つてハツ当たりで起きたに過ぎない事だし、意図的に助けた訳ではない。

獣人解放はハツ キリ言つて、オマケだ。私のハツ当たりに勝手に付随してきたオマケ。

・・・・しかも、なに？あの「女神様」の発言。

あんな事言つた覚えないし！しかもなんか厨二病チックだし。いやいやいやいや、誰だよこの絵本作ったの！偽造しそうだらう！

！盛りすぎだらう！――！

ぜんつぜん子供向けの絵本には向かないぞコレ！

しばらく女神様が獣人達を解放するページを魂の抜け出た状態で眺めていた私は、無意識に絵本の表紙の「めしあさまのものがたり」というなんとも分かりやすい題名の下の作者名を確認した。と、同時にガツクリと肩を落とす。

そこには「ロード・レドリア」の文字。

・・・・・ 覚えのありすぎる名前に本当に魂が昇天する思い

だった。

なにしろ私の知り合いで中にロード・レドリアといつ男が存在するのだ。

猫の一族の黒い耳と尻尾を持つてゐるしたたかな性格をしている男で、いつも私に「好きだ」と言つて憚らなかつた物好きの一人で、しかも、こういうことしそうなヤツ。

だから、もし私の知つてゐるロード・レドリアとの絵本の作者が同一人物なのであるとするならこの絵本の内容も頷ける。

・・・十中八九本人だろうけど。

彼は私が嫌がる事をするのが大好きで、よく何かしらの嫌がらせ（彼曰くいたずら）を仕掛けてきていたのだ。

私が本当に嫌がるような事はしないし、根本的には良い奴だつたので私も本当の意味で彼を嫌いになることはなかつたのだが・・・・・まさか500年経つてもなお私に対して嫌がらせをしてくるとは。。

しかも、今までの嫌がらせの中でも一、二を争えるほどにインパクトがあるものをww

出会つたあの時に躊躇わざに殺つておくべきだつたか？

あまりの仕打ちに身体が一層大きく震えるのが分かつた。

今はいない（獣人の寿命は長いものでも大体が60年程だから）彼が目の前にいてくれたらよかつたのに心底思つた。

目の前にいてくれたなら・・・・・全力で痛め付けてやつたといふのに。

と云ふが、どうもこいつもやり逃げにも程があると思つ。

・・・いや、ほんとは勝手に500年もの長い時を眠つてたのは私であつて、彼らはその間に決して抗うことの出来ない「死」というものによつてこの世から去らざるをえなかつた・・・・・というの

は分かつていいのだ。」

「ああ、私は何を言つてゐるんだろうな。頭の中がミキサーで搔き混ぜられたかの如くグチャグチャなのだ。

「そここの獅子の一族のアントア。」

「は・・・・ハツ！」

「悪いけどこの絵本の女神様は私じゃないわ。期待させて悪かったわね。」

「……といふことでしらばつくれる事にしてみた。

口八丁手八丁。女優な私には余裕余裕。大丈夫、頑張れ私の表情筋。彼らが勘違い（いや、助けた事はホントのことだけど）している理由は髪と瞳の色、あとはルガが原因である。ウン、ダイジョウブ。なんとか逃げ切れる……と期待したい。

「ですが、貴女様は伝承にある通りのお姿です！！」

「髪と目の色の事？確かに珍しいかもしないけど、無い色じゃないわ。」

「そんなことで断定されても、と苦笑紛れに言おうとして、「それだけではあつません！」と遮られる。

「ああ・・・・嫌な予感。

「伝承によると、その女神様の項には神を表す紋章があると言われています。貴女様の首にもありますよね・・・？」

「アリマスヨー。」

ここまで連行される間になんか首触られてるなーとは思つてたけど、まさかそれを確認するためだつたとば。

私の髪は長くて背中まであるから基本的に紋章は人の目に入る事は無いし、私自身、自分で紋章を見る事はほぼ無いからすっかりその存在を忘れていた。

私の項にあるのは、創造神であるクロノスの愛娘であるものを示すもので、簡単に言つてしまえば翼の生えた十字架である。まあ、すんごい綺麗な刺青×100倍くらいのものを想像して貰えれば手っ取り早いと思つ。

愛娘と言つても、ホントの娘なわけじゃないんだけど。
それほど大事にしますよーっていう田印つてだけ。
つまりは、私に手を出せばクロノスに手を出したも同義・・・といふことなワケ。

ちなみに言うと、私からすればクロノスは過保護系ほのぼのパパな性格の持ち主だつたりする。

地の精靈神であるグランも似たような性格の持ち主だからこの二人はとても仲が良い・・・つてアレ?何の話してたんだっけ??

くうん・・・

シンシンと突かれて、ハツと目が覚める。

マジで現実逃避してたっぽい。戻つて来い、ワタシ。

心配そうに見てくるルガを撫でくり回した私は、もつ何だかいろいろと考える事が面倒臭くなつてきていた。

もーね、投げやりになつても良いと思つんだ。訳分かんないし。

・・・・・と、いうことで

この世界で一番の創造神、クロノス召喚。

「つないだ女の絶対領域の」つだと思ひの（後書き）

訳分かんなくなつたのは姫けやんじやなく、あたし
（、ヽグスンツ

何を書いてるのか分かんなくなつてきますw
ちよつと待つて、整理しようかワタシ一なノリです、ヽヽヽ

そしてクロノス召喚。。

パパーといふ言葉で召喚されちゃうんです、ハイ

感想、やら指摘などござんお願いします。

あんまり辛辣だと心が折れます。まつせりこまわ（、ヽヽヽ）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3480t/>

ウソとホント(仮)

2011年5月30日22時57分発行